

平城宮北方遺跡の調査

— 第445・447次

1 第445次調査

本調査は奈良市佐紀町内での住宅建て建設に伴う発掘調査である。調査地は第一次大極殿の北方約290mに位置し、平城宮北方遺跡に含まれる(図195)。調査区は南北3m、東西3mの範囲に設定した。層位は地表から盛土約15cm、旧耕作土約10cm、赤茶褐色粘質土(地山)で、地山面で遺構を検出した。検出された遺構は柱穴1基、土坑3基、溝1条である。遺構覆土には一様に焼土と炭化物片が含まれる。柱穴は深さ約50cmの隅丸方形の土坑で柱抜取痕跡が観察された。柱穴の柱抜取痕跡からは瓦器が出土しているため、中世と考えられる。遺物は瓦器碗、瓦器皿、土師器、瓦、炉壁が出土した。遺構覆土からは一様に焼土、炭化物、炉壁が含まれるため、中世の鑄造関連遺構の可能性が考えられる。

2 第447次調査

本調査は奈良市佐紀町内での住宅建て替えに先立つ発掘調査である。調査地は第一次大極殿の北方約330mに位置し、平城宮北方遺跡に含まれる(図195)。調査区は建替住宅の建物敷地内において、基礎設置位置を避けて南北3m、東西6mの範囲を設定した。面積は18㎡。調査は2008年10月22日に着手し、10月29日に埋め戻しを完了した。基本層序は地表から造成盛土(1)約60cm、水田耕土(2)約20cm、水田床土(3)約15cm、黄褐色粘質土(地山)(4)である。検出された遺構は土坑5基、性格不明遺構4基である(図197)。遺構検出面は黄褐色粘質土



図195 第445・447次調査区位置図 1:5000

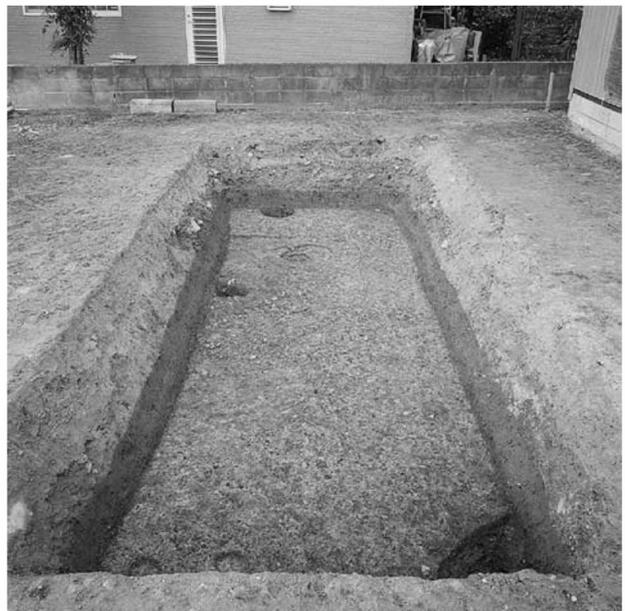


図196 第447次調査区全景(東から)

(地山)である。

全ての遺構覆土には焼土・灰・炭化物・炉壁片が多量に含まれていたため鑄造関係遺構と考えられ、瓦質土器が含まれていたため時期は中世と考えられる。とくにSK296とSK297は楕円形の土坑底面の一部が深くなって段になっており、同じ構造である。その上をSX298が覆っている。SX298は一辺1.5mの方形の範囲に、焼土が薄く溜まっているSX299を切って、白色粘土を敷き詰めた遺構である。SX301は深さ170cm以上の軟質な覆土が確認されたため井戸の可能性があり、瓦質土器・磁器が含まれていたため時期は中世である。

出土遺物は瓦質土器の摺鉢片、青磁片、磁器片、土師皿、瓦片(古代・中世)、炉壁である。遺構出土の遺物は中世に限られる。遺構覆土には焼土、炭化物とともに炉壁片が一様に含まれるため、具体的な性格は特定しづらいが中世の鑄造関係遺構と考えられる。先行する周辺の調査では同様に中世の鑄造関係遺構や同時期の井戸が検出されており、中世には一帯で広く鑄造関係の作業がおこなわれていたと考えられる。

(国武貞亮)

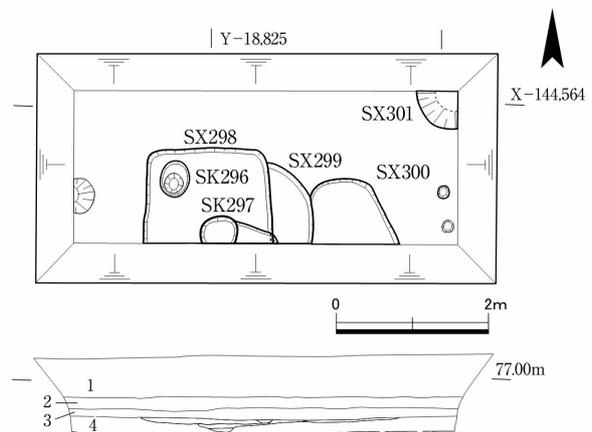


図197 第447次調査遺構平面図・断面図 1:100